関東支部ニュース

第60号

2026年3月23日発行
日本比較文化学会関東支部

2025年度最後のレター発行となります。本号では、2026年3月16日（月）に東京未来大学にて開催されました「第67回関東支部例会」での支部会員の発表要旨について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長　長田　元

◆第 67 回 関東支部例会 ご報告◆

2026 年 3 月 16 日（月）、東京未来大学において第 67 回関東支部例会が開催されました。当日は 3 名の支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。以下、例会での会員の研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶：関東支部 支部長　郭 潔蓉（東京未来大学）

◆研究発表：

旧讃井病院の洋風建築にみる日本人大工の創造性の展開
―欧米文化と日本文化の比較の一環として―

茨城県笠間市役所
相馬　法仁

1922 年に竣工した旧讃井病院は、福岡県直方市に現存する洋風建築である。大正期の直方の様子を象徴する貴重な建造物である。しかしながら、様式や細部について、本格的に分析・発表された例は少ない。建造物の価値を明らかにしておくことは、最終的にその保存へとつながることが期待でき、重要であるといえる。この旧建物について、2025 年に報告者が行った調査結果を、写真等を用いて報告したい。

〇旧讃井病院創立の背景

大正期の直方市は、筑豊炭田の中心地にあり、市内を流れる遠賀川から、若松へ石炭を運ぶことが産業の柱であった。それに伴い、労働者やその家族が集まり、産業・文化ともに発展した。当時の写真資料などから、直方市内には複数の洋風建築が立ち並んでいたことがわかる。とりわけ大きな規模を保持していたのが讃井病院である。創立者は医師の讃井源次郎であった。政界・経済界との繋がりをもち、犬養毅が讃井を訪問した記録もある。

〇旧讃井病院の建物について

旧讃井病院の外観は、縦に伸びるラインや幾何学的な装飾から、セセッションやゴシックの印象を受ける。また、内装の手すりやカウンター窓などには、アール・デコの要素を窺うことができる。一方で、内部構造を確認すると日本人大工の技法が目立つ。例えば、短い柱を接ぎ木する手法や壁面の基礎を竹と紐で作る手法などが挙げられる。つまりこれは、洋風文化と大工の技術が融合していたこ

とを意味している。当時の大工達は、欧米文化の受容と日本の伝統技術を用いた表現を同時に行っていたといえる。少なくとも、彼らが洋風建築と日本建築を比較していたのは確かであるものの、その違いを一体どう受け止めていたのであろうか。

キーワード：観光学、地域資源、デザイン、建築

親しい三者自由会話における発話の重なりの機能の対照研究
―日本語母語場面と中国語母語場面の比較―

日本女子大学　学術研究員
周　浩

本発表は、日本語母語場面および中国語母語場面における自由会話を対象に、発話の重なりの「機能」に焦点を当てて対照的に検討するものである。従来、発話の重なりは会話規則からの逸脱や競合的行為と捉えられてきたが、生駒（1996）はこれを「停滞」「促進」「中立」の三機能に分類し、とくに会話を前進させる「促進」機能の重要性を指摘した。一方、陳（2019）は中国語母語話者の重なりについて、対人関係への配慮よりも自己表現意欲が前面に出やすい可能性を示している。

本発表では、親しい関係にある三者による自由会話を分析対象とし、両言語場面の発話の重なりを同一の枠組みに基づいて分類・比較した。その結果、日本語母語場面では「促進」が「停滞」より有意に多く、重なりは共感・同意・補足を通して会話を協力的に構築する機能を担っていた。中国語母語場面においても「停滞」は限定的で、多くは相手発話への反応や補足として機能し、会話を阻害しなかった。以上より、親しい三者自由会話では、中日両言語とも発話の重なりは基本的に協力的資源として機能することが示された。

キーワード：日本語教育、会話分析、対照研究

酒田市の総合計画における港町文化の位置づけについて
―都市のエレメントに付加された文化に着目して―

岐阜聖徳学園大学
長田　元

北前船の「西回り航路」の起点であった山形県酒田市は、総合計画において自らを港町(湊町)であると位置づけ、港を活用したまちづくりや文化政策を推進している。港町に関する文化には祭り、食品のほか、施設や街並みが挙げられる。施設や街並みについては、都市デザインやランドマークなど都市を構成する要素から考察することができるが、これら施設と文化の関係、とりわけこれら施設が人々に都市を象徴する施設として認知される場合に文化がどのような役割を果たしているかについては十分に解明されていない。

本研究は、酒田市の総合計画における港町や港町文化を構成する行事等の記述の特徴や位置づけを解明することにより、同計画に酒田市の港町に関連する施設にどのような文化の要素が付加されているかを明らかにすることを目的としている。

本研究では、1961 年から 2022 年までの酒田市の総合計画における港町文化の記述を調査した。調査の結果、酒田市の総合計画において「港町」または「港町文化」の用語は 1986 年以降使用されてい

た。その背景には、港町文化が浸透していた中で、これら港町文化を代表する施設である山居倉庫や日和山公園が酒田市を象徴するノードやランドマークとなった。加えて、これら施設の特徴として、河村瑞賢や36人衆といった人物に加え、進取の気風という人の精神に関する記述も認められた。これら施設は単なる施設ではなく、人物や進取の気風といった精神、日本遺産といった文化の要素が付加された都市のエレメントとなった。このことが酒田市の総合計画において港町や港町に強い関連を有する文化施設が記述された背景にあることを明らかにした。

キーワード：地域文化（港町文化）、都市のイメージ（都市デザイン）、文化政策

◆閉会の挨拶：関東支部事務局長　長田 元（岐阜聖徳学園大学）

＊閉会後、2025年度関東支部総会を開催した。

◆2025年度 関東支部総会 ご報告◆

1. 議長選出
   満場一致にて、関東支部副支部長 金塚 基（東京未来大学）が議長に選任された。

2. 総会開会の辞　議長　金塚 基（東京未来大学）

3. 会則の改正　関東支部事務局長　長田 元　（岐阜聖徳学園大学）

4. 2026年度活動計画　関東支部長　郭 潔蓉（東京未来大学）
   ①　国際学術大会　2026年5月23日（土）同志社大学
   ②　関東・東北合同支部例会　2026年8～9月（予定）関東主催にて開催
   ③　関東支部例会・2026年度総会　2027年3月（予定）

5. 関東支部設立40周年記念事業　関東支部事務局長　長田 元　（岐阜聖徳学園大学）

6. 2025年度会計報告　関東支部事務局長　長田 元　（岐阜聖徳学園大学）
   会計報告の詳細は、後日学会ＨＰに掲載予定。

7. 2026年度予算案　関東支部事務局長　長田 元　（岐阜聖徳学園大学）

8. その他
   ①　合同例会における費用負担について
   ②　例会の参加形態について